



ヒューマンストーリー⑤

東京スカイツリーを望む下町・墨田区で、梅一分教会（吉永昭悟会長）を会場にした子育てひろば「かあかのおうち」が開かれている。

室内をのぞくと、おもちゃで遊ぶ子供たちと、その様子をにこやかに見守るスタッフたち。隣の居間では、若い母親たちが、お茶を飲みながら「育児談義」に花を咲かせている。

乳幼児を抱いた母親が新たにやってくる、代表の「かあか」こと吉永道子さん（55歳・同教会長夫人）が「お帰りなさい」と出迎える。

「一人で育児の悩みや不安を抱えている母親が『ひろば』を訪れたとき、人類のふるさと・ちばへ帰ったときのよう『お帰り』と迎え、家に帰ってきたような安心感を与えたい」

時報の記事がきっかけ

「子育てひろば」は、厚生労働省の「地域子育て支援拠点事業」の一つで、3歳までの乳幼児とその親や妊婦が自由に利用できる。子供の遊び場を提供するとともに、親同士も交流を深めることを目的としている。社会から孤立し、不安を感じる母親の精神的な負担を軽減することが期待されており、現在、全国各地の拠点は約7千カ所を数える。「かあかのおうち」は、同区で初めて民間が運営する「ひろば」として開設された。

民生委員を務める道子さんは、高齢者の見守りに努める中で、「地域に根差した活動を」と、積年の思いを温めていた。

4年前、都内で「子育てひろば」を運営する女性教友を紹介する『天理時報』の記事が目にとまった。「私がやりたい活動は、これだ！」

4人の子供を育ててきた道子さんだが、「教会家族に支えられていた私でも、育児に思い悩んだ時期が少なからずあった。きつと、一人で子育てする母親は、育児の悩みや不安を抱え、大変な思いをしているに違いない。若い母親

十数回開催。午前10時から午後4時までの間は自由に来所できる。また、体操教室や誕生会などの行事のほか、節分の豆まき、ひな祭りといった季節ごとの交流イベントも実施している（コラム参照）。

実家のような安心感を

この日、初利用者3組を含む14組計29人の親子が「ひろば」と「一時預かり」を利用。子供の面倒は、保育士や看護師の有資格者ら5人のベテランスタッフが引き受ける。

一方、母親たちは、昼食や「3時のお茶タイム」を一緒に過ごし、家庭的な雰囲気の中

若い母親の拠り所 「かあかのおうち」

に寄り添う活動をしよう」と心に決めた。

後日、記事の教友のもとを訪ね、「ひろば」運営のノウハウを学んだ。そして、自身の「ママ友」の協力を得て子育て支援の研修会に参加し、一昨年5月に「ひろば」をスタート。4カ月後には「一時預かり」も始めた。

「かあかのおうち」は、月に

中で育児の情報交換や近況報告をしながら交流を深めた。

午前11時半からは英語教室が開かれ、歌や手遊びを通じて、楽しみながら親子で英語に親しんだ。

教室を開くようになったきっかけは、英語講師のイギリス人男性を夫に持つ佐藤秀子さん（39歳）が、昨年4月に初めて「ひろば」を利用した

ことにある。

「周囲には、地元を離れて知らぬ土地で誰にも相談できず、子供と二人きりの育児に息詰まっていた母親が少なくない。『かあかのおうち』では、育児経験の豊富なスタッフが子供をあやしてくれるので、まるで実家にいるような安心感がある。一緒に昼食を食べながら、ここで出会った「ママ友」と交流できるのも魅力の一つ」と話す。

その後、佐藤さんは「ママ友」に声をかけて「かあかのおうち」を紹介したほか、道子さんの提案を受け英語教室を開くことにしたという。

こうして「かあかのおうち」の活動は、児童館や保育園に貼られたチラシや口コミで広まり、現在登録している母親は130人になる。

これまでの活動を振り返って、道子さんは言う。

「育児中の若い母親たちの多くが、孤立した状況で心の拠り所を求めている。そうした母親に寄り添う中で、神様のお引き寄せによって多くの人と縁を頂いてきた。これからも下町ならではの人情で若いママたちを包み込み、安心して子育てができるようにサポートしていきたい」

東京の吉永道子さん



「かあかのおうち」を利用する若い母親に子育てのアドバイスをする吉永さん

コラム

【利用者をつくる交流行事】

「かあかのおうち」では、利用者の母親がそれぞれの経験や特技を生かし、新たな取り組みや交流イベントを行っている。現在「英語教室」「ピラティスヨガ教室」「体操教室」などを月1回実施。このほか行政とのつながりから、新日本フィルハーモニー交響楽団を招いて「親子コンサート」を区内の学習センターで開催。会場は約200人の来場者で満員となった。